



これは世につたえておきたい
かたっておきたい
わが胸の底から真実のおもい
人生幾山河のめぐりあい
あの日の風やひかり そして空のひとひら
哀歓のかがり火に生きた幾年月の路
「自分史図書館」はその証言館です。



私の稀覯本ノート その11

椎窓 猛

○熱帯柳の種子 中村 地平

〈版画荘〉刊

ふりかえって私が文学に関心を寄せるようになったのは17、8歳の青年前期の頃である。西公園下の師範学校の学生時代に当る。戦前は規律もきびしい全寮制度で、『花の店』『チェーホフの猟銃』などの詩集で抒情詩人と知られた安西均は、啄木の『一握の砂』や林芙美子の『放浪記』といった文学書を発見され退学処分となっている。戦後の師範寮は抜き打ちの私物検査はなく、“国語”教師の平井秀文先生は、私が文学書に親しむことを歓迎され、「人間」「展望」などの総合誌を読むようにもすすめられた。

その頃、西公園通りに「郡田書店」と看板をあげた古本屋があつて、よく立寄った。そこで求めた一冊が中村地平著『熱帯柳の種子』である。

著者は宮崎市の出身だが、台北高校から東大へ。学生のころ、井伏鱒二の知遇を得、創作活動をはじめ、太宰治らとの交友でも知られる。ここにとりだした一冊は若いころの処女作品集だが、みずみずしい南方浪漫性に魅かれて愛読。今も大切な蔵書の一つである。(自分史図書館長)

別れがたき影が影負ふ花野かな
稲妻のおのれを刻む刃かな
津軽三味切り崩されて天の川
独り旅二人となりて秋と行く

(東京・杉並区)



○貼絵でつづる四季

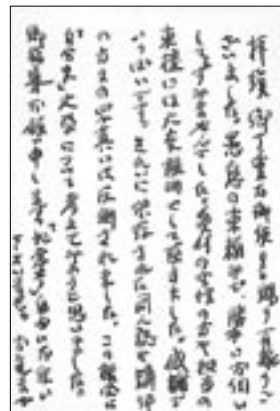
うずみ火 むらまつさちこ
妹の香田孝子さんのあとがきによると、姉の幸子さんは「若くして夫と死別、息子三人と共に実家へ」デパートに勤め、包装紙の美しさに心ひかれ、収集、それを素材に貼絵をはじめられた集成の豪華本である。

貼絵のそばには、「サフランの球根は、土の中で夢を見ていました。いつか自分が天国へ召されてゆく日まで」といった感懐が記されている。

巻末には近詠の短歌が加へられている。「父なくて思ひ出もたぬ子等なれば恋しとふことも遂になかりし」

カットは「白い教会」
村松さんは大正10年、南満州生まれ。「音楽が聴こえる情景」と文芸評論家深野治氏の讚がある。

句 白遊
つつみ眞乃



○『詩と眞実』と中田さん

昭和23年、荒木精之、森本忠、甲斐弦氏らの手によって熊本から発刊されている文学同人誌「詩と眞実」は、650号を数えるとのことである。

この同人誌は、全国でも高名、いわばこの領域の冊誌では老舗である。

その編集発刊の元締役、中田幸作氏が、熊本市から、『自分史図書館』を訪ねていただき、冊誌ご恵贈に預り、まことに有難いことである。

650号の記念誌には中田さん執筆の巻頭言が掲載されている。私が注目したのは、ビデオ、インターネット等の自由な表現、売らんかなの商業主義の影響で「文学」に衰退の兆が見えはじめたなかで、「詩と眞実」の持続力は、県民性、風土に支えられているという発言である。

節くれの指

星野 秋水

超高級である玉露
その玉露の幻なる製品を追い求める手揉み師玄三……
求道者のように一徹に生きる後姿に、親子の絆、家族の絆、家族とは……を問う。



著者の星野秀水氏は、本名仁田原秀明といわれ、県立高校に勤務されている。ペンネーム、本名からも推察されるように、八女郡星野村のご出身である。したがってこの作品は玉露茶の生産に命をかけられた尊父をモデルに描かれたノン・フィクションといってもよい物語である。

私はこの第一稿に当る創作を拝読している。立派に上梓された著書を手にしたとき、玉露を揉みあげるかのように原稿に再度たちむかわれた姿勢に感服したものである。

「親父は広い玉露園でもお袋も自分も一番好きだと言っていた茶園の中で逝った。横たえた顔は、静かな顔である。顔の付近には茶の白い花が無数に散らばっている……」こうした終章「魂の花」の数行をここにとりだしたが、玉露茶に生涯を賭した男の一生がていねいに描きあげられている。



○海碧き島よりふるさとへ
海南戦線、思いを集めた手紙から

倉ノ下和代
元 田 一

人生史サークル『黄櫨』の会員、倉ノ下和代さんから大平洋戦争下、出征の父から、故里の母への往復書簡が百通もこえ、今なお大切に母堂が保存されているという話を聞いた。セピア色に褪せ、古びた手紙の束ではあったが、当時、かよいあわせられた心の絆は光っている。「いくさのながき流れのなかに野菊の如く生きた」人生記録である。そして両親の時代をしのぶ孝養の上梓でもある。この一冊は元田家、梓書院の藤山さんの献身的な熱意によって出来た。



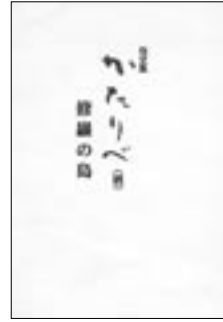
○南十字星の下で
句文集 かたりべ
永田 呂邨

永田呂邨氏は島根生まれのお方だが、現在県下小郡市に在住、句文集を四冊ほど出版されている。ここに紹介するのは、そのうちの二冊である。

「南十字星の下で」には全滅島といわれたレイテ島戦況を主に綴られている。

そのまえには中支大陸、徐州会戦記もあるので、戦争体験歴戦の兵士であったともうかがわれる。

出征の日のこと、「出発の汽笛が鳴って、ゴトンと動き始めたとき、窓に顔を出している私の手を掴んだ者がいた。ひょいと窓下を見ると、大きなお腹をあえぎあえぎ妻の小さな手があつたのには驚いた。妻は左



手に持ったハンケチを私に渡そうとしたが、受取る瞬間、汽車がゴトンゴトンと速度を早めたので——ハンカチは、ひらひらと舞いながら列車とホームの間に落ちていった——」

こんな感動的なシーンを持つ一兵士の記録は、貴重なものであることを記しておきたい。

○句文集「かたりべ」〈修羅の島〉からは心ひかれた句をあげる。

- ・三連水車みどり十方 浄土中
- ・金盃に銀の千鳥や 年酒酌む
- ・生きて尚余白埋めん 日記買ふ
- ・妻逝けり中有の春 寒からん
- ・ゆきし妻持たすものなし 凍の夜



○さあ、前を向いて
木村 悦子

木村悦子さんは、大正5年、三潁の生まれ。福岡高女から東京女子専門学校へ。戦後、柳川高女教諭から八女津女子高教諭など歴任。

ご主人は版画家でも知られる木村晃郎氏で、妻の自分史について解説されている。末尾に「あくまでも正しく強く、そして勤勉に、この20世紀の大半を生きてきた一女性」と要約されているのに共感した。

はじめに「大きな孫もいる76歳の私。それなのに“お母さん”などと寝言。“お前が羨ましいよ”と夫が言う。年を重ねるごとに母への思いと故里の幼い日々への切ないほどの思いは強くなる」この思慕の情が、自分史を編まれる端緒になったものと感銘を受ける。

く、の、き、ゆ、ら、売、る、い、時、
至、一、る、く、ゆ、ら、売、る、い、時、
便、冊、き、く、く、く、く、く、
な、は、よ、く、く、く、く、く、
役、手、う、く、く、く、く、く、
目、も、う、く、く、く、く、く、
を、と、う、く、く、く、く、く、
果、に、う、く、く、く、く、く、
し、置、い、て、

希望する。
最近、書店でも、あの時、あなたは何をしていますか」と、問いかけて『自分史年表』が発売されている。大正から昭和、平成へと移りゆく社会事象と参照できるように、この一冊は手もとに置いて至便な役目を果たす。

に、キラリと光る”人の世“の真実、小さくとも美しい”ひとごころ“にふれ、感銘を受ける。
今年、戦後60年、還暦の年だと言われたが、“戦争”がいかにかに人生を流転させたかが、自分史の書物から汲みとられること、再三。戦後、経済も豊かになつた時代に成人した人々には察知されない哀感、別離、情愛といったものを、「自分史図書館」から読みとってもらえたら……と、寄贈本を手にしなが

編集掌話

▼「Ya」を編集するには、ご寄贈の本を読まなければ仕事は始まらない。目を通すたびごとに、ささやかな「自分史」のなか